



コラム

化学工業日報掲載

化学志す人材の育成、長期的視点で

10月21、22日に大阪市北区のキッズプラザ大阪で「化学の日 子ども化学実験ショー2017」が開催された。台風21号の接近にともなう悪天候のなかでも2日間で約6000人が来場したこと自体、化学業界にとって嬉しい。集まった子どもたちは紙おむつや万華鏡、PETボトルといった身近な品物を使った化学実験に目を輝かせていた。

一方、9月中旬には島本町立第一中学校（大阪府三島郡）で「プラスチックを作ろう」と題した特別授業が行われた。実験が成功すると生徒たちから歓声が上がリ、実験後のレポートには生徒一人ひとりが思い思いの感想を熱心に書き込んでいた。化学を志す人材の不足が叫ばれて久しいなか、また少子化で採用難が深刻化するなか、子どもたちに化学の魅力を伝えるこうした取り組みが今後、ますます重要になりそうだ。

文部科学省が全国学力・学習状況調査に関する詳細分析の一つとして2013年度に実施した委託研究「理科に対する意欲・関心等が中学校段階で低下する要因に関する調査研究」では、実験が好きな児童生徒は小学生中学生とも多い半面、実験も理科も好きな層は中学生で減少することを明らかにしている。

また現地調査の結果から、理科への関心や意欲が高い中学校では、生徒の興味を引いたり、印象

に残る実験、最新の情報や生活に関連した理科の話題の提供といった一連の工夫がなされていることも分かった。

調査研究の報告では、中学生の理科に対する関心・意欲は実験・体験があれば向上するのではなく、実験の内容を理科で教えている内容と結び付けることが重要だと指摘している。

子ども化学実験ショーや中学校での特別授業は、この部分にも配慮と工夫がなされていた。まずは興味深い体験を通じ化学に関心を高めてもらう、それとともに実験の意味を分かりやすく伝えるという取り組みは理科離れ、引いては化学離れを打開するうえで、地味かもしれないが着実な道といえよう。

特別授業を行った中学校の教諭は「器具や材料を集めるのが難しく、学校単独で同様の実験を行うのは難しい」と話していた。出前授業や実験ショーは、化学企業なしでは成立しないということでもある。

少子化が進むなか、有効求人倍率の上昇が続き、採用難が深刻化しつつある。一方では理系離れが言われて久しい。将来的に化学を志す人材を増やすためにも、子どもに化学の魅力を伝える取り組みを業界挙げて、さらに拡充していくことが求められる。